CLAIR REPORT

地方団体と芸術支援

（財）自治体国際化協会　CLAIR REPORT NUMBER 107 (September 22, 1995)

Council of Local Authorities
for International Relations

財団法人 自治体国際化協会
CLAIR
〒102 東京都千代田区霞が関3-3-2 新霞が関ビルディング19階
TEL 03-3591-5483 FAX 03-3591-5346

目　　次

はじめに …… 1

第１章　ロンドンのクラシック音楽状況 …… 2
　1　概　況 …… 2
　2　音楽団体とホールの数 …… 2
　3　代表的なオペラハウス、コンサートホール、オーケストラの運営状況 …… 3

第２章　英国の芸術支援体制 …… 9
　1　芸術の一般状況 …… 9
　2　アーツ・カウンシル (Arts Council) …… 9
　3　地域芸術協議会 (Reagional Arts Board) …… １３
　4　地方団体 …… １４
　5　民間部門 …… １７

第３章　ケーススタディ …… ２０
　1　ハンバーサイド県、スカンソープ市及びブースフェリー市 …… ２０
　2　ハマースミス区 …… ２５

おわりに …… ２７

参考文献 …… ２８

はじめに

なぜロンドンでの音楽会の入場料は日本に比べて遥かに安いのだろうか。ロイヤル・オペラやイングリッシュ・ナショナル・オペラ、ロンドン・フィルやロンドン交響楽団が5ポンドから、海外からのベルリン・フィルやウィーン・フィルも7、8ポンドくらいから聴くことができる。

この疑問を解く鍵はいろいろ考えられるが、日本との最も大きな違いと考えられるのは、芸術を水道や公園と同様に市民生活の中で必要不可欠なものと考えて、政府・地方団体が芸術助成を幅広く行っていることである。

本稿では、第1章でロンドンのクラシック音楽の状況とコンサート会場について概観し、第2章で英国の芸術支援体制について紹介することとし、第3章でケース・スタディーとして地方団体の芸術支援、芸術への考え方を紹介する。

実際、現場に行って地方団体職員、地元の住民、議員等と話をしてみると、芸術が本当に身近なものとしてとらえられ、市民の芸術への関心も非常に高いことがわかる。

日本では、芸術は、高尚なもの、難しいものという意識が根強く残っており、土地代の高さや劇場・ホールの数が少ないことなどから、低廉な価格での芸術の提供は困難なようである。

このレポートは、ロンドン事務所の阪東正紀所長補佐（大阪市）とティム・キーナン（現地職員）が調査をした結果を取りまとめたものである。このレポートが、今後日本の地方団体が芸術政策を推進していく上で何らかの参考になると幸いである。

最後に、調査にあたり御協力いただいたハンバーサイド県のジェフ・スワロー氏、スカンソープ市のイアン・リーキー氏、ブースフェリー市のヘレン・コルマン氏、ハマースミス・アンド・フラム区のティム・イーストップ氏に、心から感謝の意を表したい。

第１章　ロンドンのクラシック音楽状況

１　概　況

ロンドンに住んでいると、町中が音楽であふれかえっているという印象を受ける。ロンドン交響楽団やフィルハーモニア管弦楽団のようなロンドンのオーケストラ、ウィーン・フィルやバイエルン放送交響楽団等の外来のオーケストラ、そして世界的に有名な弦楽四重奏団、合唱団、ピアニストが同じ日にコンサートを開く。どれも聞きのがしたくないものばかりだ。オペラも同様で、ロイヤル・オペラが『薔薇の騎士』をやっているかと思えば、イングリッシュ・ナショナル・オペラで『リゴレット』、サドラーズ・ウエールズ劇場では巡回オペラ団が『セベリアの理髪師』をやっていたりという具合だ。音楽の世界的大消費地である東京でも実現できないような高レベルの演奏会が連日連夜開かれている。

コンサートホールは多くあり、オペラハウスも大規模なのが２つと小規模のものが数箇所ある。教会ではオルガン・コンサートや教会音楽のコンサートを昼夜開いている。

クラシック音楽のオフシーズンである７月後半から９月前半にかけて、ロンドンのロイヤル・アルバート・ホールでは「プロムナードコンサート」が開かれる。ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団やクリーブランド管弦楽団、ドレスデン・シュターツカペレ、そしてホスト役のＢＢＣ交響楽団等世界的な楽団が、連日連夜演奏会を開く。

また、スコットランドのエディンバラでも内容・規模ともプロムナードコンサートに優るとも劣らない演奏会が同時に開かれる。イングランド南部のグラインドボーンでも、ドイツやスイスの音楽祭に引けを取らない「グラインドボーン・オペラ・フェスティバル」が開かれる。クラシック音楽のファンならずとも、一度は訪れてみたいものばかりである。

２　音楽団体とホールの数

日常的に定期演奏会を開き、独自の音楽監督を持ち、かつ楽団員の生計の大部分をその音楽活動から得ている英国内の音楽団体は、オーケストラ・室内オーケストラが２１５、オペラ及びそれに類する音楽を上演している団体が７６、バレエとダンスの団体が１８、合唱団（オーケストラ、オペラハウス付属を含む）が１７０ある。小編成の室内楽団や四重奏団、２～３人のアンサンブルなどは、統計のとりようもない。また、条件は違うが、軍楽隊のブラスバンドが３４ある。それにピアニスト、バイオリニスト、声楽家、管楽器奏者、教会のオルガニスト等の数を入れると、英国内では実に多くの人々が音楽に従事し、競争しているといえる。

一方、コンサート会場の数は、年間最低６回以上クラシック音楽を上演しているものだけ（学校、教会、５００人以下のホールは除く）で３４０ある。これに宗教上の節目ごとに音楽を上演している教会を入れると大変な数になる。音楽学部を持つ大学の数は４９で、

それら以外に１１の音楽専門学校（コンセルバトワール）が存在する。また、大学や各種の機関が学生や社会人向けに行う短期間の音楽セミナーは２００に及ぶ。さらに、音楽祭も、前期のプロムナード・コンサートやエディンバラ音楽祭のように１か月以上に及ぶフェスティバルから１週間程度のフェスティバルまで含めると、年間２１０か所で開催されている。

以上の対象には、学生やアマチュアのオーケストラ、合唱団や成人教育のピアノやバイオリン、音楽一般のクラスなどは含まれていないから、実際には大変な数の人が音楽に触れていると思われる。

３　代表的なオペラハウス、コンサートホール、オーケストラの運営状況

次に、ロンドンの代表的なオペラハウス、コンサートホール、オーケストラを紹介する。財政状況は、それぞれの団体の年間レポートによるものである。

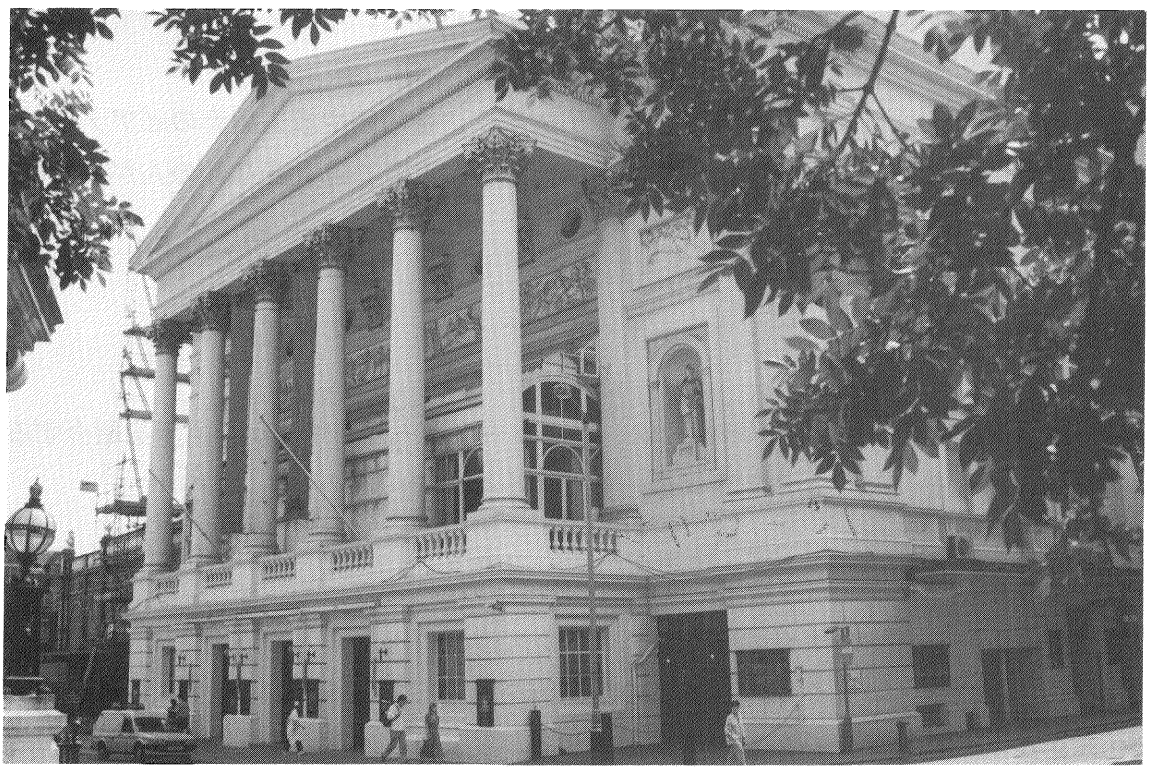
１）ロイヤルオペラハウス（The Royal Opera House）

座席数２，０１１を持つロイヤル・オペラハウスは、ロイヤル・オペラ、ロイヤル・バレエ、バーミンガム・ロイヤル・バレエの３部門を運営している。音楽監督は、オランダ人のベルナルト・ハイティンクである。１９９３年度には、オペラを１５０回、バレエを１２２回上演している。９４年度には、オペラでは、『リング』『オテロ』『アイーダ』『西部の娘』『薔薇の騎士』等、バレエでは『胡桃割り人形』『ロミオとジュリエット』等が上演されている。

９３年度の総収入は５２，９６３千ポンド（約８５億円。１ポンド＝１６０円）で、内訳はチケットの売上げ等が２５，２４４千ポンド（４７．６％）、国の援助が１９，５４６千ポンド（３６．９％）、企業や個人、ロイヤルオペラ友の会等からの寄付が８，１７３千ポンド（１５．４％）となっている。９３年単年度では１，４４６千ポンドの黒字だが、１，３６４千ポンドの累積赤字がある。

料金を払う聴衆の率は、平均８７％である。年間約５０万人（うち１万２千人が１８才未満）がロイヤルオペラハウスの公演を見る。ここの入場料は、４ポンドから約１３０ポンドで、その他の劇場に比べるとかなり高いと思われるが、５０万人の聴衆のうち２９．５万人は、何等かの形で割引きされ、２５ポンド以下で入場している。９３年度には、オペラ部門はロンドンの外に出なかったが、バレエはロンドン以外で１３．５万人の聴衆を集めている。またＢＢＣの放送を通じて、年間約３３０万人の人がロイヤル・オペラハウスでの公演をみているといわれる。

同オペラハウスは、９７年から２０００年までの大改修工事を計画しているが、その資金１億ポンドの目途が立たず、９４年１１月から導入された英国国営宝くじの収益の一部を使えるよう、当局と交渉中である。



ロイヤル・オペラ・ハウス

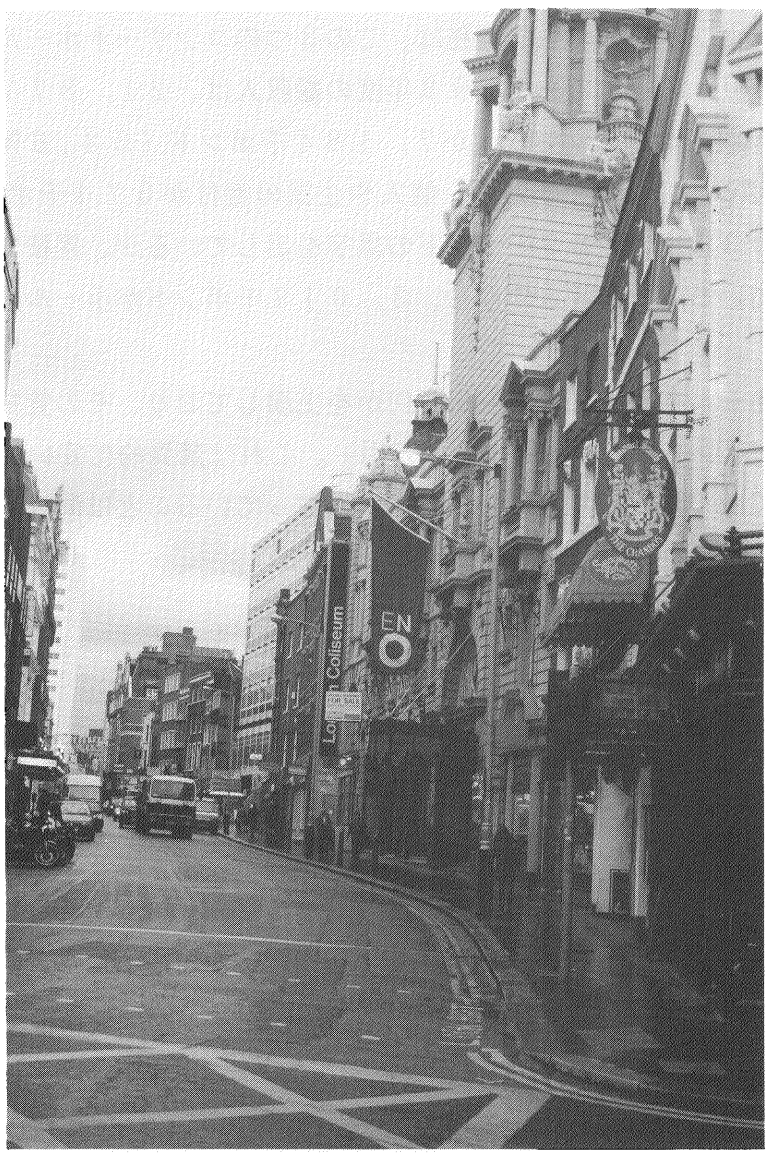
２）イングリッシュ・ナショナル・オペラ（ The English National Opera: ENO ）

ENO は、すべてのオペラを英語で上演するところに特色がある。座席数は２，３５８、現在の音楽監督はオーストラリア人女性のシャーン・エドワードで、年間２２０回のオペラを上演している。９４年度の主な演目は『トスカ』『ピーター・グライムズ』『フィガロの結婚』『ホバンシチナ』『リゴレット』『蝶々夫人』等で、ロイヤル・オペラに優るとも劣らない演奏水準である。

９３年度には、年間約３５万人が ENO の公演を楽しんでおり、うち料金を払った聴衆は平均７１％であった。９３年度の総収入は、２１，４１１千ポンド（約３５億円）で、うちチケットの売上げ等が８，４０１千ポンド（３９％）、国の援助が１１，６５５千ポンド（５４．４％）、ウエストミンスター区からの援助が１５７.２千ポンド（０．７％）、企業や個人、ENO 友の会からの寄附等が、１，６７８千ポンド（７．８％）となっている。約５５％が公的補助で賄われているが、９３年度は８２４千ポンドの赤字を出し、累積赤字は３，１２０千ポンドとなっている。

ENO の場合、入場料金が５ポンドから５０ポンドとロイヤル・オペラに比べ低く抑えられているが、さらに学生、低所得者、障害者の人々のための割引きがあり、入場者の６０％が、何らかの割引きを受け、２５ポンド以下で入場している。

また、９４年度から聾唖者のために、舞台の袖に手話の通訳者をいれたオペラ公演を何度か行っている。ENOも２０００年までの改修工事を計画しており、約５千万ポンドの改修工事費を英国国営宝くじの収益金で行えるよう、ロイヤル・オペラと同様に当局と交渉中である。



イングリッシュ・ナショナル・オペラ

３）サウスバンク・センター（The South Bank Centre）

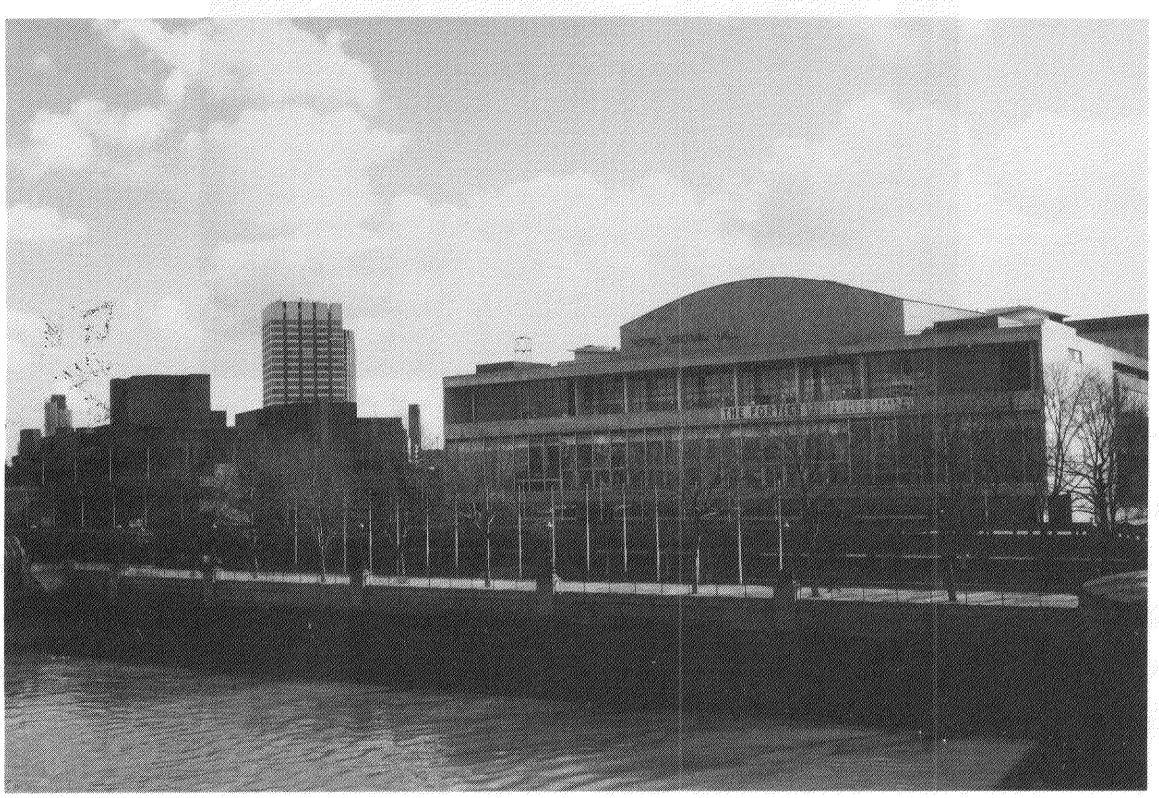
サウスバンク・センターとは、ロイヤル・フェスティバル・ホール（The Royal Festival Hall）、クィーン・エリザベス・ホール（The Queen Elizabeth Hall）、パーセル・ルーム（The Purcell Room）の３つのコンサートホールとヘイワード・ギャラリー（The Hayward Gallery）を合わせた総合芸術施設の総称である。

このうちロイヤル・フェスティバル・ホールは、ロンドン・フィルハーモニー管弦楽団の本拠地である。同ホールでは、ロンドンの５大オーケストラのフィルハーモニア管弦楽

団、ロイヤル・フィルハーモニー管弦楽団、ＢＢＣ交響楽団が常時、公演を行っている。クィーン・エリザベス・ホールは、主に中規模オーケストラや室内楽用のホールで、アルバン・ベルク弦楽四重奏団、ジョン・エリオット・ガーディナー率いるモンテベルディ合唱団、ロンドン在住の内田光子等が定期的にコンサートを開いている。パーセル・ルームは、ソロや小規模な室内楽、ランチタイム・コンサート等に使われている。

サウスバンク・センターのおもな業務は、この３つのコンサートホールのレンタルとヘイワード・ギャラリーの運営である。９３年度の総収入は、２１，３７７千ポンドで、貸ホール業、美術館収入などの営業収入が７，１８４千ポンド（３３．６％）、国の援助が１３，３３０千ポンド（６２．３％）、個人や企業の寄付が５７４千ポンド（２．６％）となっている。９３年度は２８９千ポンドの黒字を出しているが、累積では３０７千ポンドの赤字を抱えている。営業収入のうち、３，０１７千ポンドがホールのレンタル収入である。

これら３つのホールでは、ほとんど毎日何かを上演しており、その賃貸料収入は１日当たり約８，３００ポンドである（約１３３万円）。これは驚異的に安い額であり、一流オーケストラを安く聴くことのできる一つの理由になっていることは間違いない。



サウスバンク・センター

4）バービカン・センター

バービカン・センターは、シティー（世界の金融の中心地。ロンドンにある１つの地方団体）が維持・管理している複合施設で、ロンドン交響楽団の本拠地である。

ここにはクラシック音楽専用のバービカンホール（座席数２，０２６）、ロイヤル・シェークスピア・カンパニーの本拠地であるバービカン劇場（座席数１，１６６）、２つの映画館（座席数２８６、２５５）、図書館（年間貸出６３２，５００件、所蔵CD８，５００枚）、芸術大学（Guildhall School of Music and Drama: ３０か国からのフルタイムの学生約７００名が所属）、２０の会議場（３，５００人収容）、温室等がある。

９３年度の総収入は、３０，２００千ポンドで、内訳は会議場やホールの貸出しで５，３００千ポンド（１７．５％）、企業、個人の寄付が２００千ポンド（０．６％）、シティからの財政援助が２４，３００千ポンド（８０．４％）となっている。

バービカンホールは、ロンドンで一番音響の良いホールと言われており、ロリン・マゼル指揮のバイエルン放送交響楽団、リッカルド・シャイー指揮のアムステル・コンセルトヘボウ管弦楽団等による演奏を、６ポンドから４０ポンドという料金で聴くことができる。

バービカン・センター

５）ロンドン交響楽団（ London Symphony Orchestra: LSO ）

LSO は、バービカン・センターを本拠地に、ドイツの大指揮者ハンス・リヒターを首席指揮者として、１９０４年、ロンドンで最も古いオーケストラとして設立された。以来、ピエール・モントゥー、イシュトバン・ケルテス、クラウディオ・アバド等が首席指揮者を務め、現在は、アメリカ人のマイケル・ティルソン・トーマスが、９５年９月からは、サー・コーリン・デービスが引き継ぐ予定である。

９２年度の総収入は７，７２２千ポンドで、その内訳は、チケット、CD・レコードの売り上げや委託演奏等が４，９６８千ポンド（６４．３％）、企業、個人などからの寄付が５３２千ポンド（６.８％）、国、シティからの助成金が２，２２２千ポンド（２８．７％）となっている。９２年度は４３千ポンドの黒字で、９２年度現在では９９，３３４ポンドの内部留保を蓄えている。

最近では小沢征爾、サー・ゲオルグ・ショルティ、ピエール・ブーレーズ等が指揮をしていることでも知られ、しばしば日本公演も行っている。

第２章　英国の芸術支援体制

１　芸術の一般状況

第１章において、ロンドンでいかに多くのコンサートやオペラが英国内で上演されているか、国や地方団体がどうかかわっているかを概観した。ではなぜ英国政府や地方団体が、このように芸術を援助するのか。

政府は、芸術を国民生活の質を高める上でなくてはならないものと認識し、他のヨーロッパ諸国と比べてどうであるか、絶えず注意している。また、地方団体でも、芸術を市民生活の質の向上、異民族の統合、地元経済活性化に必要なものと考えている。実際、芸術分野は、最近の景気後退の中にあって成長した数少ない産業のひとつであり、英国内で５０万人の雇用と、１８０億ポンドを生み出し、海外でも約６０億ポンドの外貨を獲得している。

後述する文化財省（ Department of National Heritage ）の外郭団体であるアーツ・カウンシル（ Arts Council ）によると、９３年度には年間３００万人（英国の成人の約６．６％）がオペラに、３１０万人（６．８％）がバレエに、５５０万人（１２．２％）がクラシック音楽のコンサートに、１，０８０万人（２３．８％）が劇場に、２８０万人（６．２％）がジャズコンサートに、１６０万人（３．４％）がダンスに、９８０万人（２１．６％）が美術館に行ったということである。

英国内の芸術を助成する団体は、その援助目的により多岐にわたり、それぞれに独自のポリシーを持っている。

国の助成は、おもにロイヤル・オペラ、イングリッシュ・ナショナル・オペラなどの大規模な団体に与えられ、小規模な団体は受けていない。これらの団体にとっては、地方団体からの助成が最も重要な財源となっている。民間企業からの助成額は、全体的にはそれほど多くなく、大半はロンドン地域にある大規模な芸術団体に与えられているが、小規模な団体に対する寄付も公的機関に比べて数多く行われている。

２　アーツ・カウンシル（ Arts Council ）

アーツ・カウンシルは、文化財省所管の外郭団体である。国による芸術援助が全てアーツ・カウンシルを通じて行われるため、英国の文化政策に多大な影響を与えている。

アーツ・カウンシルの前身は１９４０年に教育委員会（ The Board of Education ）が、民間の財団との共同事業として始めた音楽芸術振興協会（ The Council for the Encouragement of Music and Arts: CEMA ）である。

設立当初の目的は、ロンドン以外の地域のアマチュアの文化活動を支援することであったが、第２次世界大戦中にプロの団体や芸術家がＣＥＭＡの支援を受け始めたことからそ

の活動内容が変化した。１９４２年には、アマチュアだけでなくプロの芸術と芸術家を強化するためにCEMAが国有化され、経済学者として有名なジョン・メナード・ケインズが会長に就任した。１９４５年に政府は、CEMAを"The Arts Council of Great Britain"として存続させることを発表した。１９４６年、ケインズは『大衆が容易に参加できる高いレベルのプロフェッショナルな芸術の促進』（これは、現在では矛盾を孕んだものとして認識されている。）をアーツ・カウンシルの目的として憲章に定めた。ケインズの功績としては、アーツ・カウンシルの決定権の大部分を内部の委員や事務職幹部から外部の諮問委員会に移したこと、戦争中ドイツ軍の爆撃等の理由で閉鎖されていたロイヤルオペラを再開したことがあげられ、これらは以後のアーツ・カウンシルの存在意義に多大な影響を与えている。

アーツ・カウンシル

その後、アーツ・カウンシルは、ロイヤル・オペラ、イングリッシュ・ナショナル・オペラ、ナショナル・シアター、ロイヤル・シェイクスピア・カンパニー、サウス・バンク等英国が世界に誇る芸術団体を中心に、有形・無形の支援を続けてきた。

現在アーツ・カウンシルが、最も重要視しているのは、以下の点である。

・芸術の知識、理解、実践の促進
・イングランド内での市民生活と芸術活動の融和
・政府、地方団体、その他の団体への助言と協力
・アーツ・カウンシルと地域芸術協議会（ Reagional Arts Board: RAB ）との交流
・国レベルでの芸術政策の概要策定
・政府からの予算の効果的な執行と管理
・芸術団体の評価

助成状況

９３年度の総収入額は約２億３千万ポンド。９９％が政府からの補助金で残り１％は企業、個人からの寄付、不動産収入などである。助成対象は、以下の８分野である。

ドラマ：　ロイヤル・ナショナル・シアター、ロイヤル・シェイクスピア・カンパニー等の劇団への支援
映像　：　映画、ビデオ、テレビ番組の制作への援助
音楽　：　オーケストラやオペラ・ハウスへの援助
文学　：　外国文学の翻訳、翻訳者会議の開催、新オペラの台本の委託等への援助
ダンス：　舞踏団体への援助
ツーリング：　オペラ、演劇等の巡回公演団体への助成
ビジュアル・アーツ：　美術、建築を中心に援助
コンバインド・アーツ：　コンサート・ホール、美術館、展示場などの複合施設への援助、ノティンガムヒル・カーニバル等への援助

この他、芸術を志す人に対する劇場その他での研修、一般市民の芸術理解のためのセミナーの開催、障害者が芸術の分野で活躍できるような支援等、芸術一般について幅広い援助を行っている。

表１　芸術分野ごとのアーツ・カウンシルの支出
（アーツカウンシル　９４年度年次報告書から）

ドラマ	３０％
音楽	２７％
ダンス	１５％
コンバインドアーツ	１２％
トゥーリング	８％
ビジュアルアーツ・建築	３％
映画・ビデオ	１％
文学	１％
その他	３％

芸術支援対策については、政治的影響を排除するという理由から、「助成はするが干渉はしない」という方針を取っており、アーツ・カウンシルは、独自の方針により運営されている。具体的な方針は、無給の芸術助言委員により決定され、各芸術分野ごとの細部の方針や事業方針は、アーツ・カウンシルにより適宜非公式に指名される人により決定される。

イングランドには、アーツ・カウンシルの重要なパートナーとして、地域の芸術援助と発展のため設立された１０のRAB（後述）がある。また、文化財大臣、クラフト協会（The Craft Council）、スポーツ協会（The Sport Council）、英国映画協会（The British Film Insitute）、イングリッシュ・ヘリテージ・アンド・ミュージアムズ・アンド・ギャラリーズ・コミッション（English Heritage and Museums and Galleries Commission）等と常に密接に連絡しながら活動している。

地域別の援助額は、表２のとおりである。支援対象は圧倒的にロンドン地域に集中しており、ロンドンを本拠地とする主な５つの団体（ロイヤル・シェイクスピア・カンパニー、ロイヤル・オペラ、イングリッシュ・ナショナル・オペラ、ロイヤル・ナショナル・シアター）に６４，１００千ポンドを援助している。

表２　イングランド地域別アーツ・カウンシル援助額

（アーツカウンシル　９４年度年次報告書から）

地　　域	総援助額	９３年度（一人当たり）	９４年度（一人当たり）
イースト	7,688,807	1.33	1.26
イースト・ミッドランド	6,853,264	2.03	2.12
ロンドン	27,638,008	4	4.11
ノース	9,607,597	3.1	2.86
ノース・ウエスト	15,853,321	2.44	2.4
サウス	9,565,027	2.07	2.06
サウス・イースト	5,065,441	1.26	1.14
サウス・ウエスト	8,736,687	2.28	2.37
ウエスト・ミッドランド	10,078,045	1.19	1.86
ヨークシャー・アンド・ハンバーサイド	12,165,146	2.43	2.51
小　　計	113,251,343	2.34	2.33
ナショナル・カンパニー	64,143,400	1.33	1.3
総　　計	177,394,743	3.67	3.63

注）従来のアーツ・カウンシルは、１９９４年３月３１日をもって、イングランド、スコットランド、ウエールズの３つのアーツ・カウンシルに分割された。ここに記載している数字は、分割前の１９９３年度のもので、英国内全域を含んでいる。

３　地域芸術協議会（ Reagional Arts Board: RAB ）

ＲＡＢは、イングランド内で１９９１年に地域芸術協会（ Reagional Arts Association ）にとって代わった団体で、現在１０の RAB がある。 RAB はそれぞれ独立した機関ではあるが、その財源の大部分をアーツ・カウンシルに依存しており、それ以外には、少額ではあるが、英国フィルム協会（ The British Film Institute ）、クラフト協会（ The Crafts Council ）、地方団体、民間等からも財政援助を受けている。

RABの主な目的はアーツ・カウンシルに代行して地域内の芸術家や芸術団体を金融面で助成することで、地域内の芸術振興は２次的な活動目標とされている。また、国レベルでも地方レベルでもない中規模の団体への援助も目的の一つである。意思決定機関である理事会は、その３分の１が地方団体の議員や職員で、残りは地域の民間企業の役員、芸術の専門家、学識経験者で構成されている。

アーツ・カウンシルは、それまで直接援助していた芸術団体のうち２２を１９９２年に、４２団体を１９９４年にRABに引き継いだ。

例えば、ロンドン地区のRABであるロンドン芸術協議会（London Arts Board）の場合、１９９３年度の予算は、総収入が１０，６７３千ポンドで、うちアーツ・カウンシルからの助成が１０，５６４千ポンドとなっている。理事会のメンバーは１９名で、６名がロンドンにある区の議員で、残りが政府の政策立案関係部局の経験者、大規模小売店であるマークス・アンド・スペンサーの役員、芸術コンサルタント、ギルド・スクール・オブ・ミュージック・アンド・ドラマの校長等となっている。また、そのスタッフは臨時雇用職員も含め４０名弱である。

４　地方団体

１）法的フレームワーク

芸術支援は地方団体にとって法的に要求されている事項ではない。そのため、地方団体は予算が逼迫すると、法的に要求されている事項以外から予算を切り詰めるので、芸術支援は景気後退の際には、すぐに危機に瀕するという弱点がある。

＊１９７８年地方自治法第１４５条第１項：

地方団体は、次の各号に掲げる事項に対し、管轄区域内外で便宜を供与、または金銭を与えることができる。

ａ）あらゆる質の娯楽、芸術施設の支援

ｂ）劇場、コンサートホール、ダンスホール等、芸術・娯楽を提供するあらゆる施設への支援

ｃ）音楽団体あるいはオーケストラの維持

ｄ）芸術や芸術に関連する知識、理解、実践の促進及び発展

ｅ）上記の各号及び舞踏、美術・工芸展覧会に付随する飲食物、プログラム、宣伝の供与

２）地方団体の支出

地方団体の種類により、芸術に対する支出の内訳には重要な相違点がある。これは、県、市町村、ロンドンの区の間での戦略の相違からくるものである。表３は、８９年度のイングランドの地方団体の芸術関連予算の総額を示し、表４は、イングランドの地方団体の一

人当たりの芸術に対する支出を示している。これらから、英国内で芸術予算にばらつきがあることがわかる。また県の支出は、全支出でも一人当たりでも小さい。その理由は次に項を改めて述べる。

表３　イングランドの地方団体種類別芸術援助額
（Chartered Institude of Public Finance and Accountancy　統計による）

ディストリクト	７，０００万ポンド
ロンドン・バラ	２，９００万ポンド
シティー・オブ・ロンドン	２，６００万ポンド
メトロポリタン・ディストリクト	２，２００万ポンド
カウンティ	１，１００万ポンド

表４　イングランドの地方団体種類別芸術援助額推移

（単位：ポンド、一人当たり）

	９０年度	９１年度	９２年度
ロンドン・バラ			
金銭による援助	1.74	3.91	3.32
金銭以外の援助	8.86	8.90	6.47
計	10.60	12.81	9.79
メトロポリタン・ディストリクト			
金銭による援助	1.22	1.50	1.53
金銭以外の援助	1.54	1.96	1.92
計	2.76	3.46	3.45
カウンティ			
金銭による援助	0.26	0.29	0.28
金銭以外の援助	0.06	0.08	0.11
計	0.32	0.37	0.39
ディストリクト			
金銭による援助	0.53	0.67	0.68
金銭以外の援助	1.99	2.13	2.15
計	2.52	2.80	2.83

３）財政援助の２層制

統計によると、イングランドでは、地方団体が行う芸術支援において、各県が２８％、ディストリクトは６４％を施設の運営・維持に支出している。ロンドンの区でも、市町村とほぼ同じ比率である。一般的には、県は芸術団体を当該県に呼ぶためのエージェントづくりや、企画作成に重点を置き、市町村はそれらに基づいてイベントを実行することに力を入れているという図式が浮かび上がる。県は、市町村や他のパートナー（地域の芸術団体等）とともに、どの様な芸術ジャンルを育成、促進するかといった芸術戦略を発展させることをおもな仕事と考えており、そのため、芸術への支出額は比較的少なくなっている。

４）地方団体における芸術支援担当セクション

芸術担当部署は、一般的にはレクレーション・レジャー部に属しているが、地方団体の規模により異なる。後述のブースフェリー市のような小さな団体では、事務総長部局で行っており、また内容によっては、複数の部局が携わる場合もある。ある劇団が社会福祉施設を訪問する際の予算については社会福祉部が担当し、ある楽器奏者が学校を訪問する場合の予算は学校関係から出るという具合である。

5）直接助成と間接助成援助

地方団体の助成には直接のものと間接のものが考えられる。直接助成としては、施設の提供・運営、芸術団体への補助金等があげられる。地方団体は、通常、劇場やホールを所有しており、所有していない場合は、補助金により賃貸料を助成する。間接助成としては、芸術団体の出版物やイベントの広告費に対して補助すること、地方団体が運営する施設を低廉な料金で貸すこと等があげられる。

5　民間部門

後述する芸術スポンサーシップ協会（Association for Business Sponsorship of the Arts: ABSA）の統計によると、１９９３年度には、民間部門は総額約７千万ポンド拠出している。

援助の方法は、スポンサーシップ（企業が支援する代わりに芸術団体も何等かの形で企業に利益を提供する）や、芸術団体への会員としての参加、芸術団体への自社の製品・サービスの提供、純粋な寄付等、多様である。ここでその活動の全容を書くことはできないが、民間部門と芸術団体を結び付けることを目的としているABSAを紹介することでその一端に触れたいと思う。

ABSAは、１９７６年に政府によって設立された組織で、英国内に６か所の事務所を持っている。９３年度の総収入は、政府から７８４千ポンド、会員企業からのメンバーシップ料３５０千ポンド、その他寄付など３７４千ポンドである。

その主な活動は、以下の２つのプログラムを遂行することである。

1）BIAプログラム (The Business in the Arts)

BIAプログラムは、芸術団体と民間企業の結び付きを強化することを目的としており、次の２つの柱から成り立っている。

・人材配置計画（The Placement Scheme）

民間企業で働いていて、財務、法律、マネジメント等の知識・経験を有し、かつ勤務時間外にボランティアとして芸術団体の仕事をしたいという人に対して適当な団体を紹介する制度である。１９８９年にプログラムが発足して以来、約５００人がボランティアとして働いており、チケットの売上げをコンピューターで管理したり、マーケティングの戦略を開発するなど、民間企業のノウハウが徐々に芸術団体で生かされてきている。

・芸術団体経営開発計画（Arts Management Development）

芸術団体の事務職員を民間企業の企業内研修や対外的な研修に参加させ、民間が持っている様々なノウハウを芸術団体に取り入れようとするものである。研修をおもな業務とす

るコンサルタント会社の中には、芸術団体の職員を無料で研修に参加させるところも数多く見られる。この場合、研修をする企業も芸術団体から人を受け入れることで、芸術の世界の動向と考え方に触れることができ、芸術支援で企業の知名度を上げると同時にその感覚を磨く良い機会となっている。

２） BSIS プログラム (The Business Sponsorship Incentive Scheme)

１９８４年に政府によって始められた BSIS プログラムは、企業のスポンサーシップを拡大することを目的としている。

その内容は以下のとおりで、スポンサーシップを行った回数で異なる。

・１回目の場合

企業が初めて１０００ポンド以上のスポンサーシップを行う際、ABSA が同額を芸術団体に提供する。

・２回目の場合

２回目は、初回に出した額と２回目に出した最低２０００ポンド以上の額との差額の半分を援助する。（例えば、１回目に１万ポンド出し、２回目に４万ポンドだした場合、増額分３万ポンドの半分の１．５万ポンドを助成する。）

・３回目以上の場合

３回目以降は、１回前に援助した額と３回目以降援助した額（最低４千ポンド）の差額の４分の１を助成する。

いずれの場合も ABSA からの助成額は１回につき３．５万ポンドが限度で、同一芸術団体への年間の助成は４回あるいは５万ポンドが限度である。

ABSA が行う BSIS プログラムは、実質的には政府からの委託事業で、全額が政府から助成されている。ABSA は、それ以外に会員、その他の依頼者に対し企業が芸術活動を援助したり自ら行う場合のコンサルティングも行っている。

また、企業の芸術団体の支援方法について年に１回審査し、優れた企業を表彰する事業も行っている。例えば１９９３年度には、海外で英国芸術を支援した者に与えられる優秀企業賞は、英国の音楽をドイツに紹介した英国人音楽家に対して援助した自動車会社のローバーに与えられている。また、企業プログラム賞は、利益の１％をマンチェスターの芸術振興に援助したマンチェスター空港会社に与えられている。

ABSA は、単に企業から金を集めるだけの団体ではなく、民間企業と芸術団体の交流を促進し、両者の相互利益をめざす団体である。

表５　９３年度英国地域別企業芸術援助

（金銭による援助のみ。自社製品、サービスの提供は含まない。）

ABSA 統計による

地　　域	援助額(ポンド)	割合(%)
ロンドン	25,225,529	48.38
サウス・イースト	5,086,471	9.76
スコットランド	3,744,223	7.18
ノース・ウエスト	2,662,333	5.10
ウエスト・ミッドランド	2,198,973	4.22
ヨークシャー・アンド・ハンバーサイド	2,244,875	4.31
ウェールズ	1,686,555	3.23
サウス・ウエスト	1,576,482	3.02
サウス	1,379,173	2.65
イースト	865,591	1.66
北アイルランド	813,771	1.56
ノース	656,507	1.26
イースト・ミッドランド	553,805	1.06
その他	3,444,684	6.61
合　　計	52,138,972	100.00

表６　９３年度英国芸術分野別企業援助

（金銭による援助のみ。自社製品、サービスの提供は含まない。）

ABSA 統計による

分　　野	援助額(ポンド)	割合(%)
音楽	10,657,310	20.44
オペラ	10,010,765	19.20
博物館及びそのイベント等	6,743,038	12.93
劇場	6,162,987	11.82
美術館及びそのイベント等	5,418,604	10.39
映画・ビデオ	2,838,757	5.44
ダンス	2,516,607	4.83
美術工芸	2,201,482	4.22
その他	5,589,422	10.73
合　　計	52,138,972	100.00